教育の広場

「モンスター」とは呼ばないで
―学校に「のびやかさ」を取り戻そう―

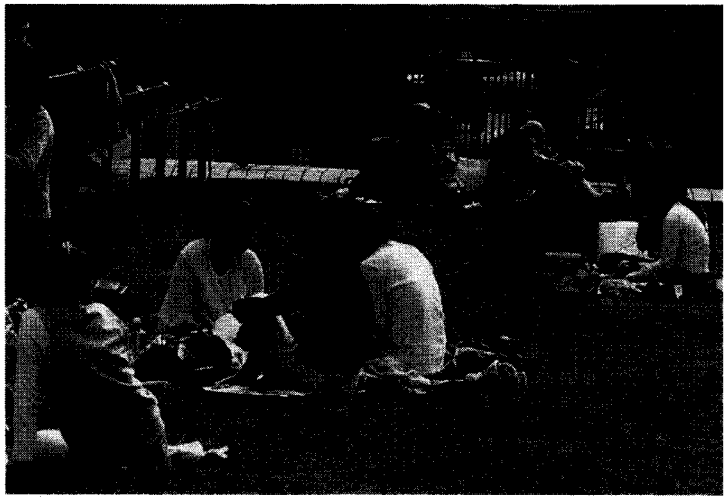
池田知隆

「モンスターペアレント」と呼ばれ、非常識なクレームを学校に突きつける保護者の存在が話題になっている。子どもを大切にするあまり非常識ともとれる言動をして教師を困らせる親は昔からいた。だが、いま、どうして〝怪物〟にされてしまったのか。子どもを少なく産んで大事に育てるという少子化の影響や、子育てへの不安の高まりがその背景にあるとみられるが、そんな刺激的な言葉の広がりで、学校と父母との間に新たな壁が作られてはいないだろうか。いま、子どもを中心にした学校づくりにむけて冷静な議論が求められている。

担任教師の関西弁が子どもに悪影響を与えている

小学校の校長をそう言って攻め立てる親。さらに合奏発表会では、子どもをビデオに撮りたいという親からの要望で客席を向いて指揮をしている生徒。今夏に人気を集めているフジテレビ系の連続ドラマ「モンスターペアレント」では、こんな光景が流れていた。

教育現場で父母たちから次々と出される要求は常識をかけ離れ、相談をもちかけられた女優の米倉涼子が演じる女性弁護士は戸惑い続ける。ドラマの中で毎回繰り広げられるクレームは、



○「特定の生徒をひいきしている決定的証拠だ」と体育の授業を映したビデオを差し出す親
○「休日の公園でジャングルジムから落ちた息子のケガは一緒にいた友達のせい。学校の安全配慮義務も欠けている」と訴訟をちらつかせる親
○断固として給食費の支払いを拒む保護者
○「医師を目指す息子に図工は必要ないので、計算ドリルでもやらせてほしい」という医師

……と実に多岐にわたっている。そんな事例の数々は、教育評論家の尾木直樹法政大教授によると、次のような五つのタイプに分類される。

①学校依存型
・子どもが朝起きるようにしつけ、学校で汚れたものは学校で洗濯してほしいと何でも学校に押しつける
・いじめに遭う我が子を転校させるので通学の交通費を出してほしい

②自己中心型
・自分の子どもがけがをして休むので、けがをさせた子どもも休ませろ
・親同士の仲が悪いから、子どもを別の学級にしてくれ
・どの教師がどのクラスを担任するかを勝手に考えて、「この通りにしろ」

③ノーモラル型
・夜中、授業時間でも電話してくる
・参観日に授業をビデオ撮影した親が「先生の授業はここがよくない」
・授業中にお菓子を食べたので注意したら、「おなかがすいていたのにかわいそう」

④権利主張型
・風邪で休んだので給食費を返還してほしい
・「住民税支払っている」から給食費を払わない
・持ち込み禁止の携帯電話を生徒から取り上げると「基本料金を日割りで払え」

⑤ネグレクト（育児放棄、虐待）型
・子どもに対して食事に気を使わず、服や髪の汚れも放置。

子どもへのしつけなどなんでも教師に求める「学校依存型」は、家庭では解決できない不安が積もり積もって、不満の

海の恵み にがりを残した

はかた
伯方の塩®

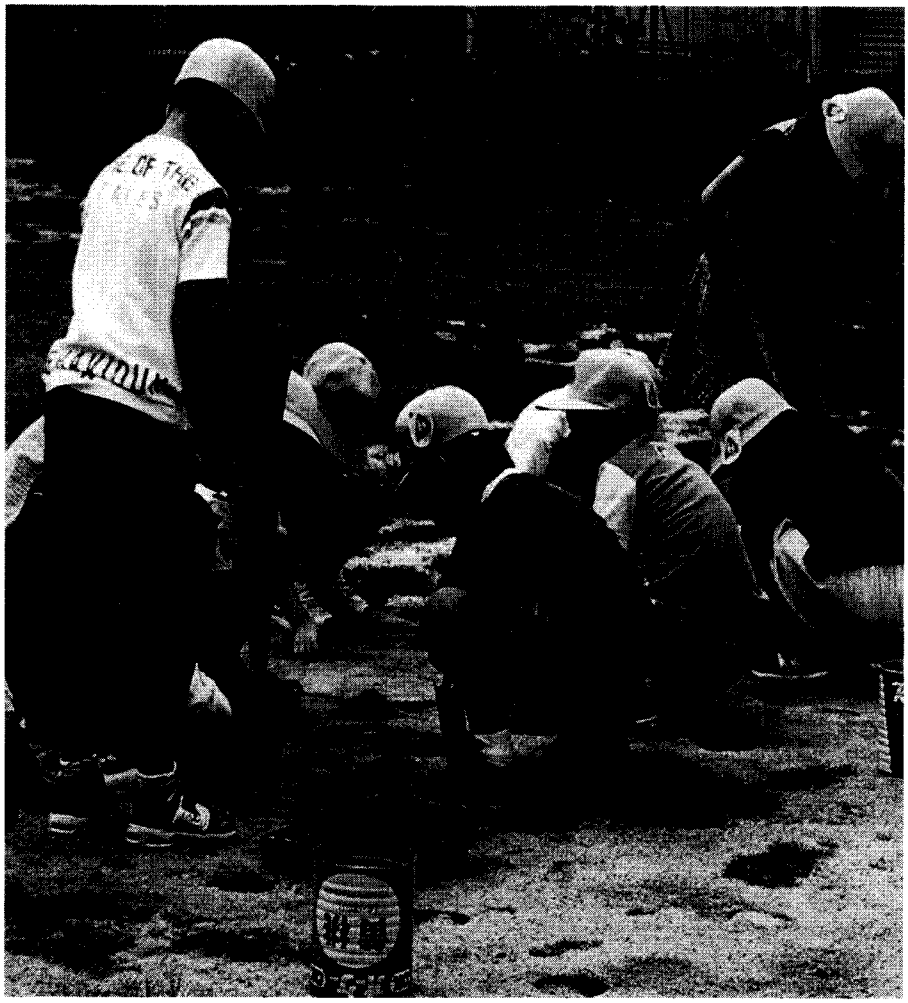
※伯方の塩®は、輸入天日海塩と海水を原料に使用しています。

伯方塩業株式会社
〒790-0813 愛媛県松山市萱町4丁目4-9
TEL(089)911-4140(代) FAX(089)923-9671
ホームページ http://www.hakatanoshio.co.jp

形となって爆発させている。「自己中心型」にみられる学校の教育内容への過度の口出しは、「親なのだから口出しする権利がある」という意識や、個性的な教育観が暴走した形といえるし、「ウチの子が写真の中央に写っていない」などの言いがかりは、家庭での過保護な感覚がそのまま漏れ出た結果といえる。

そんな親が自分の子どもに対する態度をみていると、「過保護型」「放任型」「過干渉型」とこれまた多様だ。いずれも家庭内の人間関係に原因がある場合が多く、過干渉型の場合、親にとって「良い子」を演じる子どもが教師の言動を大げさに報告し、事態を悪くすることがある。また、子どもの言い分をうのみにする溺愛型、教師の困った様子を見て満足する欲求不満解消型、あるいは利益追求型――などの要素もみられる。

そこで共通して見られるのは、子どもへの愛と同時に自己愛の強さで、子育てに自己実現を映してしまう傾向の強い人がモンスターになりやすいようだ。



学校「信仰」の崩壊

だが、いったいどうして、学校に対するそんなクレームが増えてきたのだろうか。旧来の、学校は子どもに対してきちんと教育してくれるところだという性善説による学校「信仰」が崩壊し、学校をちゃんと監視しないと子どもをだめにしてしまうと学校性悪説のように考える親が多くなっている。そのように学校観が少しずつ変容していった背景には、

1、教師への敬意の喪失
2、保護者の消費者意識の広がり

3、地域の絆の喪失

という三つがあげられる。

「モンスターペアレント」という言葉が登場する以前、このような親からのクレームを「親のイチャモン」として研究してきた大阪大学大学院、小野田正利教授によると、こうした保護者が目立って増え始めたのは1990年代後半からだという。

そのころ、子どもが学齢期を迎えた親の多くは、70年代後半から80年代前半にかけて学校が校内暴力で荒れた時代に思春期を過ごしている。荒れる中学生たちを黙って見過ごしたり、事なかれ主義で無責任な態度に終始したりした教師を見て、教師だから尊敬するという思いを抱くことが少なくなった。さらに、バブル期に社会に出たために、就職の人気があまりなかった教師職についた人をみて特段の敬意を払わなくなった。保護者が高学歴化することによって「先生＝聖職」の価値観が薄れてきている。

「サービス機関」となった学校

さらに学校教育の「消費社会化」があげられる。学校を「教育サービス機関」とみなし、保護者はその利用者というような消費者意識が広がってきた。保護者は自分の子どもが学校で他の子どもより「損」な待遇を受けることが我慢できず、「同じ値段を払えば、同じ商品が手に入る」という意識で教育サービスをとらえるようになっている。例えば、ある学年の学級担任が新卒、中堅、評判の良いベテランというような構成になった場合、自分の子どもが「評判の良いベテラン教師」以外に担任されることを不当待遇、と考える親が増えている。

本来は、家庭でやらなければいけないしつけなどを学校に要求し、「先生なんだから、とにかくなんとかして」と詰め寄るのは、店でサービスを受けるお客様感覚だ。ひいては学校教員は「先生」ではなくサービス窓口の「店員」、学校長は「支店長」だ。それこそ商品の欠陥を責めたり、返品や交換を迫る消費者のようなクレームが教育現場でも成立するようになっている。

さらにいえば、格差社会に対する保護者の不安感の高まりがある。リストラや給与カットなど経済的不安や社会的孤立感を抱えている保護者自身が、その不安や不満のはけ口を学校や教員に求めている。保護者の中でも特に、「既に子育てを経験している。経済的な余裕は無いが教育ママ度はそれなりに高い。パート勤務の母親」（「生活切迫型パートママ」）は学校への信頼度が低く、クレームが多いという傾向がみられる。

それらに加えて地域の人間関係が希薄になった。かつては近所の仲良しグループで悩みを相談しあったり、地域社会が緩衝材となっていた個々の親の不満が吸収していたが、それらが直接学校に持ち込まれるようになっている。

危機管理が求められる学校

こうした保護者が一人でも出現すると、教職員はその対応に膨大な時間を奪われてしまう。その結果、他の児童・生徒のために使う（教材研究、授業準備、生徒指導、部活指導、補習などの）時間がなくなり、学校全体に悪影響が広まる。さらに直接教員に言わず、校長や教育委員会など、より権限の強い部署にクレームを持ち込んで、間接的に現場の教員や学校に圧力をかけるやり方も増えている。そんなクレームへの対応を誤ると、「ぺんぺん草も生えない焼き野原？」といわれるほど学校が荒廃してしまいかねない。

2006年の1万校の小中学校の校長を対象にして行ったあるアンケート調査では、小、中学校の約3割の校長が「保護者の利己的な要求」が深刻な教育の障害になっていると答えている。「やや深

刻」と答えた5割近く、合わせて8割近い校長が保護者の利己的な行動を問題視しているという。

そんな理不尽なクレームへの対応、そして学校内の人間関係のプレッシャーなどから、心的疲労のあまり抑うつ状態になって休職する教員の例も決して少なくない。特に、経験が浅い新任教師は適切な対応ができず、問題を抱え込んでしまいがちだ。06年には西東京市の市立小学校に着任した女性教員が、一部の保護者から深夜に携帯電話に苦情電話をかけられるなどをされた結果、自殺している。

また08年1月、子ども同士のケンカで軽いけがをした子どもの両親が、子どもを預けていた埼玉県狭山市立保育所の女性所長に対して4か月にわたって苦情を言い続け、最終的にこれらを苦に女性所長が焼身自殺したという悲惨なケースもある。

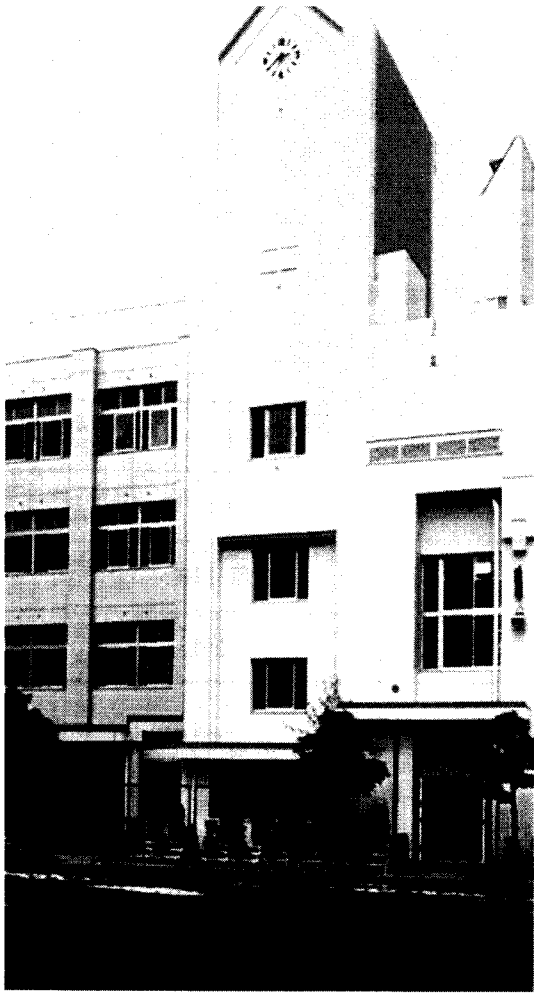
文部科学省の調査では、06年度にうつ病など精神性疾患による病気で休職した小中高校など公立学校の教員が過去最高の4675人。14年連続の増加で、10年前の97年度（1609人）より約3倍に増えている。

「モンスター」とは呼ばないで

では、このような非常識な保護者たちのクレームにどう対応していけばいいのか。多様なクレームに教員個々では対応できるものではないし、学校全体や教育委員会を含めた組織的な対応が求められ、事例によっては外部の知恵が必要になってくる。

ただ「モンスターペアレント」は、普通の人間がモンスター化している状態であり、常にモンスターというわけではない。モンスター化した親は周囲の適切なサポートがなく、客観性を失った状態にある。「絶対にこうあらねばならない」「悪いのは教師（医師）だ」と一方的に思いつめたモンスター親になる可能性は、実は誰にでもあることだ。小野田教授は、「モンスターペアレント」のイチャモンを額面通りに受け取るのではなく、その要求によって「モンスターペアレント」が実際には何を求めているのかを察知し、可能な解決策を探るという手法を提言している。

大阪市教育委員会が小野田教授の協力をえて「保護者の苦情対応マニュアル」を08年度に制作。学校と保護者の協調こそが望ましい公教育のあり方であるという立場から、この中では「モンスター」との呼称は使われていない。



先に採りあげた「モンスターペアレント」の事例は、客観的に見て常軌を逸したものに映るかもしれない。しかし、どんなに冷静な親であっても、子育てとはなにかと迷うものだ。子どもを心配するあまり、冷静さを失ったり、常軌を逸するのを一方的に責めるだけではすまされない。母親がモンスター化するのは子育ての不安に起因し、父親がモンスター化するのは、子どもへの攻撃を自分への攻撃と感じるなどして自尊心が傷つけられたことによるものが多いと見られる。

「モンスターペアレント」とは、あくまで学校教員の立場から見たものだ。それぞれの保護者・子どもにはそれぞれの事情がある。それが果たして教員と共有されているのだろうか。それが共有がされていないと、時として保護者の物言いが「怪物的」と映るのかもしれない。

どちらにしても、やはり学校と保護者のコミュニケーションが密に取れていて、お互いに顔を知り、お互いの置かれた状況が想像できていればモンスター化は防げるのではないか。「顔が見える学校」と「顔が見える保護者」ならば、極端な事態に陥る前に問題解決の道を探れるはずだ。

子ども第一の発想を

テレビドラマは、タイトル「受け」を狙って「モンスターペアレント」という言葉を使っている。実際のところごく一部の「問題保護者」だけの事例をあげ、保護者全体が悪くなっているかのような論調や、保護者にも規範意識や社会常識をもっと学習させるべきだなどという動きには十分に警戒しなくてはいけない。真剣に学校と関わろうとしている保護者が、教師との距離を必要以上に置いたりするような事態を招いてしまいかねないからだ。

保護者もぜひ、テレビなどに描かれた「モンスター」の姿を他人事として笑うのではなく、

「自分は子どもの学校ときちんとコミュニケーションできているか？」

「自分の姿はモンスターにはなっていないか？」

と客観的な視点を得る機会にしてみてはどうだろうか。

冷静に考えると、現在の「保護者バッシング」とも見えるテレビドラマやマスコミ報道は、これまでの「学校・教員バッシング」「教委バッシング」と同じような構造をもっていると言えなくもない。「モンスターペアレント」という語の持つ印象が、保護者と学校の対立を煽る方向に働き、クレーム行動をする人間を今度は徹底的にバッシングする風潮の出現が心配される。

保護者をモンスター扱いにすることによって、教師に寄せられた意見のすべてを「不当なもの」とみてはいけない。「教師は子どもにとって絶対的な存在」であるのも確かだし、その事実を教師たちがきちんと認識して、もう一度寄せられた意見やクレームを教師の立場から振り返ってほしい。

学校や教員が悪い、教委が悪い、そして保護者も悪い――そうなったら、子どもたちの教育の責任は、誰がもつのだろうか。

学校・教員、教委、保護者のいずれにも問題が少なくないことは確かだ。しかし、相互不信を増大させるような「モンスターペアレント」騒ぎからは、本当に教育を良くするような社会的雰囲気は生まれてこない。子どもにとって何が最良なのか。学校は子どもたちが第一で、教師の都合、親の都合は二の次に考えていきたい。

何が子どもたちのためになるのか、を真剣に考え、子どもたちが「のびやかに」学校生活をすごせるように、教師も親も地域社会も一生懸命に努力すべきなのは、いうまでもないことだ。お互いの立場や気持ちを思いやり、信頼しあってこそ、その努力が実るのではないか。そしてこれからの社会を担う子どもたちにとって、そうした大人たちの姿こそが最大の教育になるのは確かだ。

NL

2008

10

CONTENTS

教育の広場

●「モンスター」とは呼ばないで
—学校に「のびやかさ」を取り戻そう— 4

NEWS ROTARY

●スピード感ある改革に目が離せぬ橋下大阪府政 11
家庭のエネルギー革新 15
独自の乳酸菌のノウハウを活かした
日本人の味覚にマッチしたチーズを食生活に 22
省エネ快適・家族のだんらんにあったかコタツヒーター 26
毎日の暮らしを豊かに演出する
クレアチンウォーター〈アズノン3000〉 30
アレルギーと上手に向き合って 34
生活と芸術—アーツ＆クラフツ展 58
大阪市立自然史博物館便り 59

REGULARS

女性ホルモンの神秘と効用——21
あのときこんなこと——36
たかが　われらが日々？——45
どれみの鼻歌——48
獣医師は、なぜ、動物の言葉がわかるの？——51
回虫博士の世界漫遊紀行—心のキレイがみえない②——52
なまずのひとりごと——56
どこで憩うか—温泉——体を癒す 湯治の宿②——62
食と健康——脳を若々しく維持するブレインフーズ①—66
京都は優雅——京都の名水を唎き歩く——69
LIBRARY——72
10月の運勢——75
編集後記——76

表紙写真　森村　進